# 意外な人の恋愛

餓鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
意外な人の恋愛

【Ｎコード】
Ｎ５２７１Ｚ

【作者名】
餓鬼

【あらすじ】
俺の名は姫条悠里（きじょうゆうり）は親の勝手な都合により婚約者を決められたその相手は白皇学院に通っているらしい。そんな物、俺には関係がなと思っていたが……あの日、俺が見たことによって俺は彼女に惹かれていった。

駄文ですがよろしくお願いします

## プロローグ（前書き）

勢いでやってしまった！　てか、新刊についていた映画を見て思いついた。

# プロローグ

ある日俺は親からいきなり言われた。
「実はね、悠里君には婚約者が居まーす」
「へっ！」
学校から帰ってきたらそんな事を言われた。
「冗談はその妖怪じみた顔だけにしてくれよ」
冗談で言ったが俺は右頬を殴られた。
「本当よ！　でもねその子は日本に居るのよ」
俺は頬を擦りながら聞いた。
「それで、日本に行こうと」
「正解♪」
母さんの顔は満点の笑顔だった。
「待て！　学校はどうするんだよ。俺はまだ、卒業してないんだぞ」
言い忘れいたが俺は１６歳で高校一年生だ！　だけどいろいろあって大学に行っています。
「それにな、日本の高校に行くより。このまま大学を出てから行けばいいじゃないか」
「それはダメよ。それに、大学の方には今日までと連絡入れといたから」
俺は固まった。
「母さんは父さんを泣かしたいのか？」
「大丈夫♪　さっくんなら泣いて喜んでくれるよ」
それは喜んでない！　唯のお金が勿体なくて泣くんだよ。
さっくんとは俺の父、姫条佐治莉（きじょうさじり）大企業の社長だが母さんのお金の使い方には反発が出来にチキンだ。この家庭の財布を握ってるのは母、姫条由紀（きじょうゆき）どこか常識が抜けている人だ。
「それで、日本に行くのは何時なんだい？」
俺は部屋の中を見ながら、呆れつつ言った。

「今からよ♪」
そうだと思ったよ！　部屋の家具が何一つ無いなんて可笑しいよね。
「不幸だぁ！」
俺は某魔術師に出てくる男の様に叫んだ。
この日から俺の日常が変わってしまった。そして、あの日を境に俺の中の何かが変わって行った……そう、春風千桜との出会いによって。

同時刻日本

「実は千桜ちゃんに婚約者がいます」
夕飯の時間に母から告げられた言葉に固まってしまった私。
「何かの冗談ですか」
私は何かの冗談だと思い聞き流そうしたが
「本当よ、その人達とは学生の時に約束したのよ「子供が生まれたらその二人を結婚させないと」そしたらＯＫくれたのよ」
なんで簡単に承諾したんだ。
「それでね。近々白皇に通うらしいの」
「それで、私にどうしろと」
「頼んだわね。千桜ちゃん」
この日、私の日常が崩壊した。でも、あの日の出来後でこうなるとは思はなかった……そう、姫条悠里との出会いによって。
私（俺）が恋を知るなんて思いもしなかった。

## プロローグ（後書き）

後悔はしない、完結まで持っていく！

## キャラ設定

名前：姫条　悠里（きじょうゆうり）

性別：男

容姿：上の中

好きな物：小説（ラノベ）、ゲーム、勉強

嫌いな物：自分を嫌な目で見る人、運動

髪の毛は黒、背は１７０後半だ。

学力が高いため１６歳で大学まで行くが母の勝手な理由により辞める。そして日本に渡る。アメリカではその頭脳のせいで友達がいない一人で勉強をしている寂しい人間だ。それでも、日本にはたくさんの知人がいる。それは三千院家、愛沢家、鷺ノ宮家、橘家といった人たちと仲がいいが兄的存在として見られている。

恋愛に関しては知識がゼロなので同世代の女子と話をするとテンパってしまう。

頭が良いのは天然な母を見てこうなりたくないと思い勉強を始めると小学生のころには高校並の頭脳になっており、誰もが認める天才だったが本人は天才と言われるのが嫌いだった。自分を見てくる同世代の目は自分を寄せ付けなかった、自分を差別していた。その為、日本ではなく国外で過ごしていたがどこに居ても同じような扱いを受けていた。

## 出会いは突然

日本について部屋を整理し終わり棚を見てみると何冊かの本が無くなってる事が分かりどうなってるのかはどうでもいいが新作の小説を買うために近くの本屋を探すことにした。
「本屋ってどこにあるんだよ」
俺は日本にはほとんど居なかったため地理などが分からず道に迷っていた。
「こうなったらスマホで検索を」
とポケットを探してみたら。
「……ない」
家に忘れてきてしまった。
「はぁ、どうするか」
財布はあるのに携帯を忘れるなんてどうしたんだろうな。
「家に帰ってから行くか」
そう思って家に向かって走り出した俺だったが、曲がり角の所で誰かとぶつかった。
「いて」
「うっ」
俺はそのまま倒れこんでしまった。
「すみません」
頭を掻きながらぶつかった人を見てみると俺と同い年の女だった。
「だ、大丈夫ですか」
俺は慌てて立ち上がり押し倒した女性に手を伸ばした。
「大丈夫です」
俺は一安心したが押し倒してしまった罪悪感は残っている。
「どこか、怪我していませんか。頭とかぶつけてませんか？」
俺が心配しながら言ったら女性は驚いた表情をしていた。
「どこも怪我してませんから大丈夫です」

「良かった。怪我していたらと心配してしまい」
「私はこれで」
立ち上がった女性は立ち去ろうとしていた。
「すみませんが近くに本屋さんは有りますか。最近こちらに来たばっかりなので教えてくれませんか」
俺はこのまま目的を達成する為に聞いた。
「近くの本屋でいいんですか」
「えっと、出来ればラノベがたくさん置いてる所はあるかな？」
見た目は年上だから普通に話せるが……
「ラノベを読んでるのか」
何だか、女性の目が輝いてる。
「そうだね。自分は話す人がいないから本をよく読むんだ」
「だったら、来てくれ」
何だか俺はこの人の何かを焚き付けてしまった訳だ。
「そうだ、見た目は年上だけど。年齢教えてくれるかな」
女性に聞くのは最低の男だがこれが同い年ならアウト。
「私は１６だが」
はい、ダウトォ！
「お、同い年」
ヤバい、同い年と分かった瞬間に緊張してきた。
「君こそ年上じゃないのか」
「いや、お、同い年だけど」
テンパってきた。
「どうしたんだ？」
「い、いや、実は俺は同い年とあまり話さないからテンパるんだよ」
「よくある、ヘタレキャラだな」
「辞めてくれない！　俺はヘタレじゃないから……あれ！」
普通に話せている。
「普通に話せてるじゃないか」
「良かった」

その間に本屋に着いたと思ったらアニメイトだった。
「ここが、アニメイトだったのか」
へえーここが日本のアニメ専門店なのか。
「始めてくるのか」
「あぁ、今までアメリカに居たからここは楽しみだ」
多分、俺の目は輝いていると思う。
「嬉しそうだな」
「アメリカと違って日本の本が読めるのはとっても嬉しいんだよ。日本語の本は中々売ってないからね」
ヤバい、俺が知ってない本がたくさんあるよ。さすが日本！　ナギが言っていたほどに良い国だな。
「買った、買った」
「凄い量だな」
俺は紙袋二つ分くらいの本を購入した。
「そんなに本が好きなんだな」
「それぐらいに友達がいないんだよ」
俺の心をえぐる言葉を言わないでほしい。
「そうだ、名前教えてくれないか。俺は姫条悠里」
「私は春風千桜です」
趣味に合う人はいいな。
「教えてくれてありがとう」
俺は袋を持って走って帰った。

その夜
「どうしたの悠里君、嬉しそうにして」
「いや、何もないよ」
スープを飲んでいると母が何かを言った
「そうだ、悠里君の婚約者の名前は春風千桜ちゃんよ」
俺は盛大にスープを吹いて、ビックリしすぎて床に頭を打ち付け気絶した。

# 転入

気絶して夜の記憶が無い悠里です。今日は白皇に登校する日です！　高校は行っていないので楽しみじゃないです。
「はぁ、二年になってからでよかったんじゃないのだろうか」
今は一月だ。だから実質後、二か月で進級なんだよな。
「勉強の方は大体ついて行けるっていうか簡単なんだよな」
教科書などは昨日届いていたので読んだが簡単だった。
「帰りたい」
そう言ってる間にも職員室に到着していた。
「失礼します。転入生の姫条悠里ですけど」
職員室に入ると一人の教師が近づいてきた。
「君がそうか、俺は君の担任だからよろしく」
おぉ！　顔に担任って書かれているぞこいつはモブなのか。
「よろしくお願いします」
俺はぺこりとお辞儀をした。
「教室に案内するか迷うからついて来てくれ」
「分かりました」
担任の後ろを歩いていくが本当にこの学園は無駄に広くないか？
「ここが君の教室だ」
普通の扉だな
「ここで待っといてくれるか。呼んだら入って来てくれ」
「はい」
待つ間どうしようかな、本でも読んでいようか？　集中しすぎてぼっとしてそうだからやめておこう。
「入って来てくれ」
その合図とともに扉を開き中に入った。

私は昨日何をやっていたんだ。初めて会った人にいろいろ話してしまった！　学校と外での話し方が変わってしまうのはいけないな。
「今日から転入生が来るから仲良くしろよ」
ん！　こんな時期に転入生かおかしくないか？　もしかして、昨日のアイツか？　違うだろう。
「そいつは何と……男だ！　喜べ女子共！　落ちこめ男子共！　しかもイケメンだぞ」
男かならあるかもしれないな、でも……イケメンではあった。
「入って来てくれ」
先生が合図して入っていたのは姫条だった。

「失礼します」
第一印象は大事だよな。
「自己紹介してくれ。姫条」
何だろう、女子の目が輝いているんだけど。
「初めまして、姫条悠里です。親の勝手な判断で転入しました、短い間ですけどよろしく」
最後にニッコリと微笑んだら、ほとんどの女子が顔を赤くしていたが、男子は睨んできた。怖いよこのクラス。
「姫条の席は……何処だ？」
先生の発言で全員がこけた。
「お前らどうした？　姫条の席は春風の横で良いか」
いや、隣に座ってる人がいるんですけど！
「おい、そこのお前の席は後で用意するから空気椅子な」
この教師、頭大丈夫かぁ！
「先生、それはひどくないですか」
「酷くない！　これは先生からの愛のムチだ」
そんな愛は誰もいらないから！　そして、普通に席を譲るなよ。
ん！　春風ってもしかして……席の横を見ると昨日あった彼女が居

た。俺は席の隣に来て挨拶をした。
「よろしく」
それにしても、眼鏡を採ったらもっと可愛いような。
「あぁ、よろしく」
ん！　昨日と全く態度が違うな、学校ではキャラを作っているのか？　少し残念だ。
「よし、授業をしたいが皆は姫条の事を知りたいと思うから質問時間にする」
おい！　教師がそんな事を言っていいのかよ！　誰か反論をしないのか！
「はい！　ここに来る前はどこに居たの」
答えないといけないんだよな。
「アメリカの大学に居ました」
「大学？」
全員の頭に？マークがついている。
「次は、何で大学に居たの」
「飛び級ですけど？」
普通に答えて良かったのか？　てかいやな目で見られるのが普通なんだよな
「すごーい」
「すげー」
ん！　予想してたより普通のリアクションだ。
「次はなんで日本に来たの」
「あーそれについてはあまり言いたくないけど、日本に婚約者が居るらしいんだ」
「らしい？」
「まぁ、親が勝手に決めたことだからね。俺的には嫌なんだよね。本人の意思に関係なく婚約なんて相手に失礼だと思うんだよ、それが俺の意見なんだよ」
「とっても優しいね」

これは俺が反対しているだけで俺が嫌がっているだけだ。でも、彼女なら良いかもしれない。そうんな感じで放課後になった。
「疲れたー」
俺は机に倒れていた。
「大丈夫か」
声をかけてきたのは春風だった。
「あぁ、ありがとう。」
「いや、帰らないのか」
「話があったんだよ。えっと、知ってるか」
「何が？」
「まだ、聞いてないのか。えっと、俺が君の婚約者です」
「えっ／／／」
え！　何で赤くなるの
「赤くなってるけど大丈夫か」
俺は立ち上がって近づこうとしたら
「だ、大丈夫だ。びっくりして焦っただけだ」
「いやだよな。勝手に決められるのは」
「私もそれは思った」
「まぁ、普通に仲良くしようぜ」
これでいいのか
「あ、ああ、そうだな」
なんだか焦ってないか。
「俺の事は姫条じゃなくて、悠里って呼んでくれ」
「私の事も千桜でいい」
これは仲良くなったで良いんだよな。
「よろしく」
俺は千春に手を伸ばして握手を求めた、これが同年代と初めてする握手だ。
「こちらこそ」
千春は俺の手を握ってくれたこの手を

「／／／／」
「／／／／」
そんな事を考えたら熱くなってきた。
「じゃ、じゃこれで帰るよ」
握っていた手を離して走って家に帰った。

## 休日

手を握った翌日は休日で家に居るのは暇だった為とある豪邸に来ている。
「よぉ、ナギ元気だったか」
客間で紅茶を飲んでいたら家の主が登場した。
「あれ、何で悠里がいる。いつアメリカに行ったのだ？」
寝ぼけてるのかこいつ
「お嬢様、ここは日本ですよ」
すかさず、青髪の執事がツッコんだ。あれ、アイツは何所に行ったんだ？
「そうだったなハヤテ」
やっと目が覚めたんだな。
「それで、悠里は何時日本に帰ってきたんだ」
「三日前だけど。それで、そこの執事は誰だ」
執事が変わったなんて聞いてなかったからな。
「あぁ、こいつは綾埼ハヤテだ。とある事情で執事をやっている」
「なんで、クライスさんが紹介してるんですか」
「いやぁ、ここで出ないと一生出番が無いような気がしまして」
お前は一生でなくていいから。
「綾埼か、俺は姫条悠里だ。悠里と呼んでくれ」
「分かりました。自分の事もハヤテと呼んでください」
「あぁ、ここの屋敷には慣れたのか」
聞いてみたら凄い顔をされた。
「慣れのは慣れましたが……」
わかるぞ、俺もここに来た時に出会ったトラを解剖したかったからな。
「それで、日本に何しに来たのだ」
「ナギ、お前は年上を敬えよ。日本には婚約者に会いに来た」

「へぇー悠里にもそんな話が来てたんだ」
「会ったが結構良かったよ」
「ヘタレのお前が良くやった」
俺ってヘタレのレッテル貼られていたのか。
「ナギ、そういうことは思っていても言ってはいけませんよ」
「二人ともそれ酷いですよ」
そう言われながら紅茶を飲んでいる俺
「それにしましてもいきなりではありませんか」
マリアさんが紅茶を注ぎながら言った。
「しょうがないよ。うちの親ですから」
「せやなユッキーの暴走は止めれんからな」
咲夜がいつの間しかいた。
「お前は何時から居たんだ」
「今さっきに決まってるやろ」
「お前は何でいるのだ」
ナギは居て欲しくないんだな分かるぞその気持ち。
「それにしましても悠里さんに会うんですかその方は？」
ハヤテは慌てながら言った
「何で皆さんはそんなに冷静なんですか」
「えっ、だってユッキー（俺の母）だし」
ハヤテ以外の全員の声が揃った。
「そんなに自由な人なんですか」
「自由すぎじゃない。あの人はほっとくとろくでもない事をするからな」
「家を空けてきて良かったんですか」
「それは問題ない。家には生贄（親父）が居るからな」
俺は紅茶を飲み終わり、おかわりを貰った。
「でも、大学はどうなったのだ」
「辞めさせられたよ。今は白皇に通っている」
「大学！」

「なんで、驚いているんだ」
この屋敷にいて驚かれるのは初めてだな
「悠里さんは何所の大学に行っていたんですか」
「ハーバードの医学の方に行っていたんだよ」
「凄く、頭が良いんですね」
笑顔で言ってきた。
「頭は良くねぇよ。親を見てこうはなりたくないと思って勉強しただけだ。それに、次頭が良いなどとほざいたらしばくぞ」
殺気を放ちながらも静かに紅茶を飲む俺
「悠里、ハヤテは強いんのだ！　悠里何て手も足も出ないぞ」
なんで、ハヤテじゃなくてお前が突っかかってくるんだよ。
「なら、勝負するか？」
俺は悪ふざけのつもりで言ったが
「受けて立つぞ！」
ナギが宣言した。
「何でお嬢様が決めるんですか」
「種目は剣道でいいか」
「ハヤテ、この前みたいにかっこよく倒してくれよ」
「大丈夫でしょうか」
唯一人、ハヤテの心配をしていたマリアさん
「なら、防具は無くて良いよな。その方が早く準備できるし」
「悠里さんは剣道はどれくらいできるんですか？」
「ほぉ、相手の強さも知らずに戦うとはダメだな」
いつの間にか現れたクラウスが説明を始めた。
「悠里殿はな、高校生男子の中では一番強いでしょう。貴様など瞬殺だろう」
「それにほとんどのスポーツでは優勝を手にして日本では知る人は知る天才の高校生なのですよ」
「だから、俺は天才じゃない」
目の前に居たクラウスの首に手刀を当てた。

「ぐはぁ」
その場に倒れ気絶した。
「はぁ、今日は疲れたから帰らしてもらうよ」
本当に疲れたな。
「うむ、その方が良いだろう。顔色が悪いしな」
その日は、家に帰り睡眠をとった。

## 知力

「今日は小テストをしようと思う」
学校に来て最初の授業が小テストとは俺もついてないな、ここの勉強ペースが分からないからな。
「どうにかなるか」
プリントが配られ表にするとやったことがある問題ばっかりだった。
「（簡単だな、五分で終わると見た）」
書き終った時にはたったの三分だった。後は終わるまでの睡眠でもとるか。
「じゃ、後ろから集めてくれ」
目が覚めた時には丁度回収だった。
「簡単だな」
そう呟きプリントを前の奴に渡した。全部のプリントを回収が終わり教師が枚数の確認をしていた。
「姫条すごいな。範囲も分からないのに満点を採るとは」
確認ではなく目で採点をしていた。モブのくせになんでスペックが良いんだ！
「はぁ」
俺はここに来てここの教師のスペックに驚いた。その日は午前で授業が終わった。
「それにしても授業数は大丈夫なのか」
そう考えていたがここの学校は過ごすのは問題ないが時間が余りすぎる。
「と言っても教室でのんびりラノベ読んでるんだけどな」
一日目に色んな部活の勧誘を受けたがそう言ったことは部活動は苦手だと断っておいた。
「なにしてるんだ悠里」

教室に入ってきたのは千桜だった。
「家に帰っても暇だから本を読もうとね」
手に持ってる本を見せた。
「まぁ、放課後なら誰もいないから静かに読めるからな」
「それより、千桜は何で残ってるんだ」
俺の質問は普通だろう。だって、午前中で終わるのに学校に残るのは変だからな。
「生徒会の仕事で残ってるんだ」
「へぇー生徒会か、何の役職についてるんだ」
「書記をやっています」
「そうなんだ、無いと思うけど大変だったら頼ってくれよ」
「なら、頼ってもいいか」
「へっ！」
いきなりですか！
「生徒会室に案内するからついて来てくれ」
「あ、あぁ、分かった」
驚きつつもついて行った。
「時計塔に生徒会室があるんだな」
それにしても高いな。
「でも、なんでいきなり頼ったんだ」
「まぁ、行ったら分かるさ」
何で、教えてくれないんだ。エレベータで上る事数分生徒会室に到着。
「騒がしくないか」
中からは怒り声しか聞こえてこない。
「それが原因ですから」
千桜は呆れながら言った。
「なんだろう、俺の何かがここに入ったら負けの様な気がしてきた」
「入って下さい」
そのまま、生徒会室に入ると三人の女子が一人の女子に怒られて

いた。
「何でいつもここで暴れるのよあなた達は」
ピンク髪の女は鬼のようなものが後ろに見えるがあれは錯覚だよな。
「あれって、スタンドか」
俺は驚きつつ千桜に聞いた。
「いつもの事だから気にしなくていいだろ」
それは怖くないか。
「あれ、千桜帰ったの。隣に居るのは？」
こっちに気づいたか。
「あぁ、彼は姫条悠里この前転入してきた人だ」
「どうも」
ぺこりとお辞儀をした。
「どうも。でも、ここは役員以外は立ち入り禁止よ」
「悠里は生徒会の仕事を手伝ってくれるそうだ」
「それなら、書記の手伝いしてもらえる」
何だろう、この人には逆らえることは出来ないような気がしてきた。
「Ｊｕｄ．」
なんでこの応答になったんだろうな。
「悠里こっちに来てくれ」
俺はそのまま隣の部屋に連れて行かれた。
「何で、応答がＪｕｄ．なんだよ」
笑っていた。
「俺の中の何かが勝手に反応をしたんだ」
「悠里もホライゾン読んでたんだな」
「小説は何でも読むからな」
あの小説はページ数は多いが読むと面白くて読みやすい。
「まぁ、書記の仕事は余りないからほとんど小説読んででも大丈夫だ」

「仕事が無いって？」
「あぁ、ほとんどヒナギクがやってくれるからな」
「万能なんだな、さっきの人」
その後は小説の話をしていただけだった。

**嘘！**

俺が白皇に通いだし時間はゆっくりとは進んではくれなかった。
「なぁ、咲夜何で俺は呼び出されたんだ」
俺は何だかテイションが高い咲夜に呼び出された。
「いやぁー悠里にな、見てもらいたいねん」
「それで、休日に呼び出したのか」
俺は呆れつつ咲夜についていく。
「悠里は何か用事でもあるんかいな」
「ない」
「それなら、いいやん」
そう言っている間に客間に着いた。
「ハルさんお客様にお茶いれて」
あれ、いつものなら執事の二人がやるのにな。
「もしかして、お前は新しいメイドが自慢したいだけか」
「ばれてもうたかぁ～」
「俺はな、お前の自慢に付き合う時間は無いんだ。お茶を飲んだら帰るからな」
「なんやかんや言って悠里は優しいなぁ」
そう言ってる間にメイドが来た。
「咲夜さん、お茶が……」
メイドの方を見てみると知っている顔だった。
「千桜……だよな」
俺は目をこすったが目の前に居るのは眼鏡を外している千桜だった。
「あれ、二人とも知り合いなん」
やっぱり、眼鏡を外してるのも可愛い。
「てか、二人の関係って何なん」
「あー簡単に言うと婚約者だな」

俺は咲夜を見ずに千桜をずっと見ている。
「そんなに見られると恥ずかしいんだが／／／／」
顔を真っ赤にしている。
「いや、だって千桜が可愛いだ／／／／」
その後ろで咲夜がにやけているのは見えない。
「学校でのキャラしか見ないから驚いた／／／／」
ヤバい、顔が赤くなってるかもしれない。
「そうか／／／／」
「（なんや、この二人いきなり二人だけの世界作ってるわ）」
「千桜はさ、婚約の件どう思う」
聞こうと思って今まで聞けなかった事
「最初は驚いたけど、悠里を見たら安心した」
「俺は君を見て好きになった。俺と付き合ってくれないか」
俺は他人の家に来てなに告白しているんだ。
「私も同じ気持ちだ」
「（はぁ、人の家に来て告白とは面白いな）」
俺の気持ちは届いたんだ。
「ありがとう。そしてよろしく」
俺はニッコリと微笑んだ。
「私こそ、その、よろしく／／／／」
「あの～お二人さん良いでしょうか」
咲夜の言葉に二人ははっと気が付いた。
「あぁぁぁぁぁ！　何やってんだ！　俺は」
「まあ、今日はハルさん上がっていいで。悠里となかようしいや」
二ヤニヤと笑いながら言われた。凄く恥ずかしい。

結局、俺と千桜は帰ることになったが顔が真っ赤になり話しかけていない。
「あのさ、本当に俺で良いのか」
それは本当に俺が聞きたい言葉だった。

「私は素でいられる悠里だからいいんだ。悠里だから好きになれた」
その言葉はとても嬉しかった。
「俺は君を好きになって本当に良かった。好きだよ千桜」
その囁きにまた赤くなる千桜、少し弄りがいがある。
「君を本気で愛していいんだよね」
「うん／／／／他の女に恋しないで／／／／」
千桜は上目遣いで言った。とっても可愛くて声が出なかった。
「少しだけ、目を瞑ってくれないかな」
俺は優しく言い、彼女はそっと目を閉じた。
「俺は君以外の女の子を好きにはならないよ」
そっと、彼女にキスをした。
「それは嘘じゃないんだな／／／／」
千桜は真っ赤になりながらも言った。
「だから、キスしたんだよ」
その言葉に千桜は頭から湯気を出して気絶した。
「え、えっ！」
俺は慌てて抱き留め目が覚めるまで自分の家に寝かせようと彼女をお姫様抱っこして家に帰宅した。

## 二年

時間が結構立ち二年になりました。始業式の前日に家に何かの覆面が白皇から届いた。
「コレを被って行けと」
これは嘘だよな。一応、千桜にメールで聞こうか。
『覆面来た？』
送信ッと、すぐにメールが返ってきた。
『来た、それにしても２０世紀〇年とは（笑）』
いや、笑えないから。これは全然笑えないよ。
「はぁ、教室の連中も来てるのか」
俺は諦めてコレを被ることにした。
「（はぁ、絶対蒸せる）」
そんな事を思いながら俺は寝た。

翌日

母親が覆面を笑ってみていたがそんな事を忘れて白皇に行き覆面を付けた。
「（あーこれは何て嫌な気分なんだ）」
これではクラスの人が誰なのか分からない。
俺が教室に入ると同じ覆面を被った人がたくさんいた。
「（凄く、帰りたい！）」
俺はそんな事を思いながらも席に着いて担任が来るのを待ったがこれは嫌だと思った瞬間に扉が開き入ってきたのは、ハヤテとナギと担任の桂のようだ。そのまま放課後になり生徒会室に来た。
「はぁ、疲れた」
覆面を採ったら目の前にはまだ覆面を被った女子生徒が三人もいた。

「それ被ってると蒸せませんか」
二人は頷いて覆面を採った。
「それにしてもこれは無いですよね」
覆面を見ながら言った。
「そうですね」
千桜は顔を手で扇ぎながら言った。
「それにしても、何で覆面なんですかね。会長」
俺は訴える目線でヒナギクを見た。
「これは私も予想外だったの」
「それでもこれは無いですよ。だって、この小説では何年前のネタだよって思われるんですよ」
「悠里君それはメタ発言よ」
「本当にこの作者は何やってるんだろうな」
「それ以上は作者が傷つくからね」
いやいや、俺はこの程度では退かんよ。
「もっと、ましな覆面があった筈ですよ。例えばシーキュー〇の仮面とか」
「それは覆面じゃないわよ」
「それとかギア〇のゼロの仮面とか」
「何だか、テロを起こしそうだからそれはダメよ」
何だか会長ってアニメ知ってるの？
「そんな事より今度のハイキングの班を決めるわよ」
「それって、生徒会の決めることなんですか」
「そうよ、均等にしないといけないから」
はぁ、面倒だから適当に班を決めていこうか。
「えーっと、確か泉兄の方はホモの噂があったから綾埼の班にしておくか」
「ねぇ、それって苛めじゃないの」
「違いますよ。これは自分の身の安全が優先だから女顔の綾埼に押し付けたわけじゃありませんよ」

ヘラヘラ笑いながら班を決めていった。
「ワタルの恋が上手くいくように伊澄と同じ班だな」
そ言って作業していると周りの三人は笑っていた。
「それって言っていいのか」
千桜が言った。
「大体の人が知ってる事だから良いだろう」
さて、大体の班が出来ていったがほとんど出席番号順だった。
「俺の班は愛歌さんと同じなんですね」
俺はアハハと笑いながら言った。
「そうね」
と言いながらノートを開いていた。
「（怖い、怖すぎる。この人は年に何回か会うが人の弱点をしろうとして怖い）」
作業が終わり帰宅に入った。
「はぁー終わった。」
俺は背を伸ばしながら言った。
「そうですね」
千桜は何だかそっけない態度をとった。
「どうしたんだ。何だか拗ねてるように見えるんだけど」
その瞬間背中をつねられた。
「悠里がヒナギクと仲良く喋っているのにイライラしただけだ」
「嫉妬してくれたんだ」
そう言って俺は千桜を後ろから抱き寄せた。
「いきなり何をするんだ／／／／」
「だって、嬉しくてつい／／／／」
俺もこの行動はビックリするほど恥ずかしい。
「俺は千桜しか見てないから」
耳元で囁いた。
「本当だな」
「本当だよ」

そう言って手をつないで家に帰った。

## 迷子？

俺は今、あの覆面を被りながら高尾山に来ている。
「いや、もうそれいいから」
担任の雪路の合図によって皆が覆面を採った。
「なぁ、ワタル」
俺は横に居る男に話しかけた。
「どうしたんだ、悠里」
「あいつ、バカだよな」
俺は担任を見ながら言った。
「それはバカだからしょうがないだろ」
ここの学校の教師はバカしかいないのか。
「それにしても、これ危なくないか」
歩きながら言った。
「そんなに簡単に迷子になったりはしませんよ」
伊澄が言ったが確信はない。
「本気か伊澄」
ワタルが伊澄に言った。
「ええ。」
「こんな山の一歩道、迷子になる方が難しいわ、ワタル君」
キラーンと効果音が流れたのはスルーしているが迷ってないか。
「ただその難しい事を成し遂げている気はしますが…」
愛歌さん周りを見ながら言った。
「あら？」
「あら？　じゃない！」
俺の叫びは響いた。
「こうなったら余り行動しない方が……って、伊澄が居なくなってる！」
「伊澄さんはどこに行ったの？」

「いつもの迷子だろ」
おいおい、目を離した瞬間に消えるなんて可笑しいだろ。
「少し、俺は伊澄を探してくるから。まぁ、頑張って頂上目指してくれよ」
今日の荷物は水とカロリーメイトしかないからな行けるのか
「悠里なんでそんなに今日じゃ見つからないような考えしてるんだ」
「伊澄だからな、俺が居なくなったら後の事頼む」
「死亡フラグね」
「行ってくるよ」
さて、死に行くか。そして、俺は山奥に行った。
「クマさえ出なければ今回のミッションは成功する」
そう言っていると綾崎たちに出会った。
「どうしたんだ急いで？」
「く、クマが出たんですけど。何で洞窟の中に居るんですか」
綾崎が言った。
「それが伊澄が迷子になってな」
それよりこれからどうなるんだ！

**クマとバトル？（前書き）**

今年の投稿はこれで終了です

## クマとバトル？

俺たちの目の前にはクマが居た。
「どうなってるんだ。何で高尾山にクマが居るんだ」
出口はない、この洞窟はただ穴が開いている物に過ぎなかった。
「それは分かりませんが悠里さんは落ち着きすぎですよ」
綾崎が慌てていた。
「こんな状況で慌ててたら何も考えられないからな」
「それもそうですけど」
「それより、どうやってここから出るって事だぜ」
目の前では顔と右手だけが見えている。
「まぁ、綾崎はコレを食え」
俺は綾崎にカロリーメイト（チョコ味）を渡した。
「ありがとうございます」
それを受け取って食べた。
「少しは冷静になったか」
「助かりました」
ここから出るにはまず、クマのどちらかの目を潰すしかないな。
「おい」
瀬川が声をかけてきた。
「どうしたんだ」
「クマの顔が外の方を向いてるんだが」
それはマズイ、絶対外には一般人が居るはずだ。俺は駆け出し外に出たらワタルと愛歌さんがいた。
「間に合えよ」
そこからまた加速してクマに飛び蹴りした。
「人の友人に何しとるんじゃ！」
俺の蹴りは顔に当たった。そして、俺には何か知らないけど担任の蹴りが当たった。

「人の生徒にって……あら？」
俺の意識はそこで刈り取られた。

目を覚ますと山の頂上についていた。
「あれ、いつの間に」
俺はベンチに寝かされていたみたいだ。だが、頭に何かの感触がある。
「気が付いたのか」
千桜の姿があった。
「もしかして、ずっと見ていてくれたのか。って、ありがとう」
俺はベンチに座り直し千桜をみた。
「いや、別に／／／／」
「ハッハ、可愛いな」
そう言って俺は千桜の頭を撫でた。
「は、恥ずかしいから止めてくれ」
「やだ、俺はこうして撫でていたいんだ」
それにしても、今日は色んな意味で疲れたよ。
「それにしても、皆はどこに居るんだ」
「他の奴は違うところで昼食をとっている／／／／」
「それだった二人で昼食、食べないか」
「そうだな」
俺は千桜の頭から手をどけてたら残念そうな顔をしていた。
「それにしても、新しいクラスは賑やかになりそうだよな」
「そうだな」
「一番疑問なのが生徒会のメンバー全員が同じクラスってな」
いくらなんでもやりすぎだろ。
「まぁ、楽しい一年を過ごそうぜ」

そう言って昼食をとったが、この一年がとっても大変になるとは思わなかった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5271z/

---

意外な人の恋愛

2011年12月31日20時48分発行